
【ワークショップ】「カタ」るヘルメス—藝術を巡る虚実の物語

〈分科会 1〉 渡辺 裕 (東京大学)

「芸術作品」をめぐる虚実皮膜の間：人々は「佐村河内守」に騙されたのか？

本年2月に発覚した「佐村河内守事件」は、芸術や音楽を研究対象としているわれわれにとっても、単に佐村河内氏の振る舞いを詐欺的行為として批判しているだけでは済まされないような、様々な問題を突きつけてくるものとなった。この事件、佐村河内氏の境遇や生き方についてのありもしない「物語」がメディアによって大々的に広められ、人々が乗せられてブームとも言うべき状況が生じたことから、極めて現代的な現象として理解され、過剰に氾濫するこうした「物語」に流されることなく、音楽の「原点」にかえて作品そのものをじっくり聴くことを唱導するような風潮も出てきている。

しかし、歴史をたどるならば、この問題は様々に形を変えた「事件」の形をとりつつ、繰り返し現れてきたことがらであることがわかる。そこでは、作品と作者、それに受容者という三者の関係性のあり方自体が根本的に問われているのであり、そのあたりのことをきちんと認識しておかなければ、同じような問題はまた生じてくることになるのではないだろうか。議論のための題材として、1961年にイギリス、BBC放送で起こった「ザック事件」、1968年にドイツの雑誌『パルドン』誌を舞台に起こった「ボブ・ハンゼン事件」などの事例を紹介した上で、参加者の方々との議論の場をもちたいと考えている。

美術作品の真贋と作家性

本ワークショップのねらいは、美術作品の真贋と作家性という、すでに語り尽くされた感のある問題を改めて取り上げ、虚実揺らめく現代的視座から問題の在り処や在り様をあぶり出すことにある。ここでは議論のたたき台として、西洋の伝統的な作家性が美術作品の真贋と結びついた歴史的経緯を、美術史研究者の立場から暫定的に提示した。ショップが、異論や反証、さまざまなケーススタディの増埒となることをめざす。

■ 古代～作家性の発生

大雑把に過ぎることを恐れずに述べるなら、西洋には、感性的地平にある像を、原型の模倣や分有、あるいはその派生や位相などを経て生み出された「媒体 / 写し」とみなす伝統がある。そして作家とは、その才によって原型をとらえ、その時々の人々の感性に訴える「媒体 / 写し」を生み出した人間のことだと考えても良いであろう。原型は、神話的世界、キリスト教的神の世界、自然、世相などと置き換えられるその一方で、「媒体 / 写し」として優位にあったのは、造形物より、文学や戯曲などの言語的著述であった。ギリシア・ローマ世界の著者像、キリスト教美術の福音書記者像をみる時、作家すなわち著者の特権性を確認することができる。彼らの著作は、写本や翻訳や造形物などの新たな媒体を通して広まったが、作家は媒体制作者に対する優位性を保持し続けた。作家こそが作品の起源を保証したからである。

■ 中世～作家性の保証

作家性の重視は、匿名性・逸名性の軽視につながる。学術論文において論述の参照先を列挙するという、先行研究を重視する今日の学術論文の形式が、ゴシック期には確立していた。影響力のある逸名の論文には、偽有名人の名前で作家性が付与された。この場合作家性を保証したのは、名前と、可能ならば、その外見であった。これらのことは作家に限らず、英雄であれ、聖人であれ、うたかたの生をとどめる最終的な手がかりであったため、流動性が強まった中世末には、古代ローマに迫る勢いで肖像制作が盛んになった。

■ 近世～美術作品の真贋

原型たる座主の模倣の真正性を保証するように思われたのは、ルネサンス的写実性であった。画家や彫刻家の手の技に、作者の名前をとどめるべき作家性が本格的に付与されたのも、芸術家の登場、地位の向上、神に匹敵する創造性が語られたルネサンス以降のことである。意識の

高い芸術家たちは、作品に署名を施し、自画像を制作し、自らの着想を著作権で守ろうとした。一点しかない作品の着想は、線描や版画などの媒体によって広まり、その引用が作者の名前と共に重視されたことは、著述の場合と変わるところがない。模倣可能な着想は、色彩というより線描にあった。有名作家作品に対する需要に応える手段は、その着想を写し、署名を施すことであった。かくして美術作品の真贋問題は、美術市場が発達した17世紀に本格的に登場した。

■近代～真贋と作家性

今日の美術史学が基礎づけられた19世紀は歴史主義の時代である。様式批判に基づく純粹形式の歴史が語られると同時に、匿名性・逸名性の淵に沈んだ作品に作家性が付与され、目的論的であれ、進歩史観的であれ、作家と結びつく形で美術作品の歴史が語られた。様式の判定は、作家性に関する見識が高い大鑑定家の経験に委ねられる場合が多く、その判定の根底にある進歩史観が、贋作者の活動を誘発することもあった。

■現代～真贋のカオスと作家性の揺らぎ

様式批判に基づく作家判定の脆さは、作品の物質面に対する科学的調査で補われようとしている。かつては、有名作家の代表作と見なされた作品が、そうではなくなったケースも少なくない。ただし、そのような作品を贋作と呼ぶかどうかとも問題であろう。模写、レプリカ、工房作、追随者の作品、代表的作家の名前を冠したグループで提示される作家性など、真の作家性が追求される活動の中で、作家性は確かに揺らいでいる。その一方で、署名ひとつで付与される作者性の在り処を揺るがせるような、概念性を重視した芸術活動も盛んである。さらには、原型なき模倣としてのイメージ生成は、原型の真正性を保証した作家性の在り様を変えている。

〈分科会 3〉 松田 聡 (大分大学)

この分科会では、西洋音楽の歴史の中でも、とりわけ「虚実の物語」と深くかかわる作品である、モーツァルト (1756-1791) の《レクイエム》(1791) を取り上げる。この作品の特異な成立事情は、周知のごとく、それにまつわる幾多の「伝説」を生み出し、その真相に関する多くの論争を引き起こしてきた。それだけでなく、現在もなお、歴史研究や演奏実践の状況の変化に伴って、新たな作品理解の提起がなされている。今回のワークショップでは、それらを、作者と作品の関係という問題に照らして捉えなおすこととしたい。まず、「伝説」全体の見取り図を示し、その上で、作曲の依頼から現代の諸版の成立にいたるまでの流れに沿って、「依頼に応じた作曲」、「慣習と独創性」、「偽作説と作品の評価」、「未完成作品と作者」などのテーマを導き、関連する事例の情報も募りつつ、議論していく予定である。

〈分科会 4〉 楠本亜紀 (非会員、写真評論家)

写真は真実かフィクションか。写真には虚実を巡っての論争がたえずつきまとっている。

写真のなかに意図的にフィクショナルな物語を持ち込むことによって成立させた作品。現実をカメラでとらえることによって生み出される写真ならではの見え方を作品化したもの。ドキュメンタリーのイメージを演出した最近のステージド・ドキュメンタリー・フォトグラフィーの傾向など、「アート」の文脈における写真とフィクションの関係を問う作品を取り上げるほか、写真の記録性と虚構性について、戦争プロパガンダも含めた幅広い文脈から考えてみたいと思う。